

令和5年度「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名： 社会福祉法人さぼうとにじゅういち

1. 事業の概要

事業名称	難民・避難民等の地域社会へのソフトランディングを支える 日本語教育プログラム展開事業
日本語教育活動 に関する特定の ニーズの実情や 課題	いわゆる「移住者」の中でも、自国内では命の危険があり、移動を余儀なくされた難民・避難民と称される人々にとって、①その移動が自身の意志によるものではない ②移動が計画的ではない ③将来に対する具体的な展望がもちにくい、という点で、移動先での定住には大きな困難が伴う。本事業における「特定のニーズ」はそのような困難を抱える「<u>難民・避難民が日本社会での自立に向けて、地域社会につながりを持ち、それぞれの定住生活をスタートさせる</u>」というニーズ、あわせて「<u>何の拠り所も地縁も人縁もない外国人が、ある地域でゼロから生活者としての営みをスタートさせる</u>」というニーズを想定している。 難民の受け入れ、「より良い」地域定住は、1979年にインドシナ難民の受け入れが始まって以来、すでに40年以上、常に議論されてきた課題ではあった。難民・避難民の数はこの間、さらに増加し、2022年、紛争や迫害などが原因で家を追われた人の数は1億人を超えているという(国連UNHCR協会)。シリア情勢も好転することなく、ミャンマーでは軍のクーデターにより状況は悪化した。さらにウクライナからの避難民はすでに2,605人(2024年3月20日時点法務省発表)が日本に避難し、加えて2021年8月にはタリバンの侵攻により多くのアフガニスタン人が退避、2022年には147人、2023年には237人が日本政府により難民認定されている。 難民支援団体である当団体では、一昨年来、とくにアフガニスタン、ウクライナ出身の方々からの相談を受けることが多くなっているが、これまでの難民の方々と比較して、いくつかの特徴があげられる。 アフガニスタンからの退避者の場合、①難民申請から認定までの期間が非常に短く、日本語だけでなく生活に必要な情報も大きく欠けており、かつ気持ちの面でも日本で生活していくための準備が整っていない ②拠って立つ安定した同国出身者のコミュニティが見つからず、コミュニティを形成しながら定住生活をスタートさせている ③単身での来日ではなく、家族単位での移動となっており、かつ大家族であることから、家長をはじめ、家族全体に大きな負荷がかかっている ④就労先が確定していない人々が多く、経済的にも生活基盤がかなり不安定である ⑤多くがイスラム教徒であり、日本社会において、宗教上の禁忌事項等を忠実に守り、良きイスラム教徒として生きていくために、様々な場面で「説明や調整」が必要となる。 また、ウクライナ避難民の方々の日本での生活も2年以上を経過し、避難した方々の心情も

	変化しつつあるように感じられる。以下が特徴としてあげられよう。①母国の情勢や家族の安否を常に心配しながら、なかなか日本での生活に積極的に取り組める心の状態に達しない ②同国人コミュニティがない地域で生活を始め、孤立感を感じながら生活をスタートさせたり、日本国内で居住地が定まらなかったりする人が出始めている ③高齢者と子どもと、様々な年代の女性が圧倒的多数を占める ④支援金で生活できている状況が、かえって就労意欲をそいでいる。 両者は共に何かしらの公的支援、もしくはそれに近い初期段階の日本語教育を受けているが、日本語力がなかなか伸びていない。 これら難民・避難民については、今まさに「地域定住」をスタートさせようとする段階にあり、「初期段階の集中日本語学習」を終えて、参照枠で言うところの「A2」レベルにある人が多いと考えられる。今後の日本語学習を継続するにあたり考慮すべき事項として以下があげられる。 ① 就労も期待されており、各人の日本語学習に費やせる時間数や時間帯が異なる ② 特定の地域ではなく、関東圏を中心に広域に散在する ③ 少数言語を母語とする人が多く、日本の生活や制度についての情報を得にくい ④ 気持ちの整理ができていない人も多いが、永く日本に留まる可能性が高い ⑤ 来日の経緯やおかれている状況への配慮が必要 このような状況に対応しうる日本語教育の仕組みやプログラムがないことを大きな課題としてとらえている。
事業の目的	・「難民・避難民が日本社会での自立に向けて、地域社会につながりを持ち、それぞれの定住生活をスタートさせる」というニーズに対応した日本語教育を行い、難民・避難民の地域定住の一助となること ・本事業の実施により、難民・避難民にとどまらず、とくに外国人散在地域において、「何の拠り所も地縁も人縁もない外国人が、ある地域でゼロから生活者としての営みをスタートさせる」というニーズに応える日本語教育の仕組みやプログラムの具体が提示できること
事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	<取り組み1> ■運営委員会の開催 全3回実施。(ただし、第1回は、委員の都合により、個別のヒアリングにより実施) <取り組み2> ■「にほんごひろば」整備事業 ① <u>「にほんごぶろぼの」ルームの開設</u> ・オンラインを活用し、難民・避難民の状況や学習ニーズに柔軟に対応する日本語学習の場を提供した。日本語教師の社会貢献活動の場としてとらえ、難民・避難民が無償で学習参加できるかたちとした。 ・文化庁による現職日本語教師研修プログラム(「難民等に対する日本語教師【初任】研修」、

「生活者としての外国人」に対する日本語教師【初任】研修受講者（日本語教師）に実践の場を提供した

- ・日本語教育の質を一定以上に保つために、アドバイザーを配置すると共に、互いの授業を随時見学可能とし、プロボノ活動を共有する仲間として日本語教師がつながり、ゆるやかな日本語教師ネットワークをつくった

- ・参加する日本語教師は、現職日本語教師研修プログラムを受講していない場合、支援参加者の初動時研修として「難民等への日本語教育」他、一定時間数の講座を受講した（取り組み4）。

- ・DV避難者等、さらに配慮が必要な方々もいることから、オンラインに固執せず、対面出張型等で柔軟に対応できるかたちを維持した。

② 地域につながるための日本語クラス（通称「つなくら」（仮））の開催

- ・「つながるひろがるにほんごでのくらし」を地域につながるための教材として活用した。

③ 生活力向上のためのワークショップの開催 ※別事業にて同様の内容を実施

- ・当団体が文化庁事業にて作成したワークショップ用資料

（<https://support21.or.jp/ouractivities/learning-program/top-page/seikatsu/>）を、「地域定住をスタートさせたばかり」の方々向けに合わせたかたちで作成し直した。「日本の教育制度」等についての基礎知識を蓄え、生活力を向上させることを目的とした。

<取り組み3>

■活動成果報告会

- ・取り組み2、取り組み4、取り組み5の成果を発表するとともに、難民的背景をもつ方をゲストに招き、お話をうかがい、日本に暮らす難民・避難民への理解者を増やした。あわせて、地域日本語教育の体制づくりに尽力する団体や自治体に、取り組みの成果を共有し、日本語教育活動の参考としていただくよう配慮した

<取り組み4>

■難民・避難民への日本語支援・活動基礎講座の開催⇒難民・避難民への日本語支援開始時研修の実施

- ・「にほんごぶろぼの」に日本語教師として参加する際には、活動開始時に全1時間～2時間の研修を受講することを参加条件とした（当初予定は全6時間）が、参加者の多くが「難民等に対する日本語教師【初任】研修」受講者であったことから、研修は個別に実施し、時間を短縮し、その他は関連資料、動画視聴を義務付けることとした）

- ・研修のテーマは「日本に暮らす難民のこと」「難民等への日本語教育」「難民の地域定住とは」「難民のこころのケア」

<取り組み5>

■「いつでもプレゼン」チャンネルの開催

- ・「にほんごぶろぼの」「つなくら」に参加する方々が、定期的に自身の日本語でのプレゼンテーションを発表できる場（YouTubeを想定）をつくった。当初は、「オンライン上に日本語学習の仲間をつくる」ことを目標としたが、難民・避難民の秘匿性への配慮から、限られた人々の動画UP

	にとどまった。
事業の実施期間	2023（令和5）年5月31日～ 2024（令和6）年3月29日（10か月）

2. 事業の実施体制

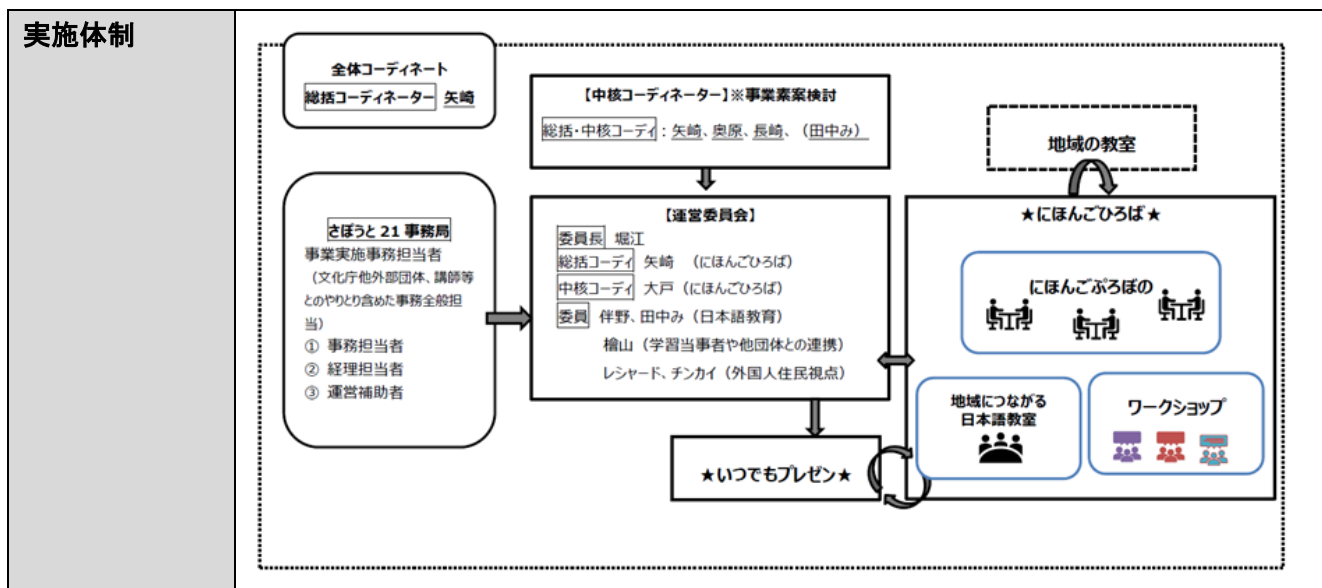
（1）運営等委員会

実施体制	構成員の人数：全8名 構成員の主な属性や専門性： <u>以下、内部委員、総括・中核コーディネーター</u> - 堀江良彰 （特非）難民を助ける会理事長、（社福）さぼうと21事務局長 難民支援（国外、国内）※事業執行責任者 - 矢崎 理恵 （社福）さぼうと21学習支援室チーフコーディネーター 日本語教育（地域、難民）※事業実施責任者 - 大戸 航 （社福）さぼうと21錦糸町教室コーディネーター 日本語教育（留学生）※中核コーディネーター <u>以下、外部委員</u> - 檜山 怜美 （特非）なんみんフォーラム 事務局員 難民支援（国内） - 田中 美穂子 早稲田大学日本語教育研究センター 非常勤講師 日本語教育（地域）、社会福祉士 - 伴野 崇生 社会構想大学院大学実務教育研究科 准教授 日本語教育（難民） - レシャード マーガララ フリーランス通訳（ダリ語他） 通訳（ダリ語他） - MA LIA MANG CING KHAI 会社員 通訳（ビルマ語） 運営方法： 第1回はオンライン、対面での個別説明と持ち回り決議、第2回、第3回はオンラインにて会議開催、必要に応じて、メール、電話での相談
------	--

（2）地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	・アジア国際支援財団難民事業本部：<u>難民当事者に関する情報の共有等</u> ・小山市役所国際課、小山市市民活動センター、小山市小山城南市民交流センター、NPO法人みんなの学び場おやま、小山市国際交流協会：<u>地域に関する情報の共有等</u> ・渋谷区役所福祉課、清瀬市役所福祉課、板橋区立前野小学校：<u>日本語教育の実施について</u>
------	--

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制



3. 各取組の報告

運営等委員会の設置 【名称：「さぼうと21・難民・避難民等の地域社会へのソフトランディングを支える日本語教育プログラム展開事業 2023」運営委員会】			
取組の目標	・計画的、かつ有益な事業がされるよう、事業を見守ること、 ・事業の評価を行うこと		
内容	① 以下の通り、運営委員会を開催した。各委員の知見が共有され、建設的な議論となった ■第1回(個別もちまわり):事業開始時 事業計画の見直し、配置する人員の決定、評価についての決定 ■第2回:にほんごぷろぼの等各取り組みの進捗状況、活動成果報告会の内容について ■第3回:活動成果報告会の実施報告、各取り組みの実施状況、評価、次年度以降の事業についての検討		
本取組により検討された事業の方針や特定のニーズに対応した日本語教育の方向性	・より多くの難民的背景をもつ人々への貢献を考え、「にほんごぷろぼの」のスムーズな運営に注力する ・より日本語学習の機会の少ない、DV 避難者、日本語教育を受けにくい非識字者、母国の事情による緊急の避難児童をより優先させる ・より多くの地域の方々に難民的背景をもつ人々の窮状、日本語教育の必要性を知ってもらえるよう、活動成果報告会では、日ごろその声を聞くことの少ない難民当事者の方のお話をゆっくり聞いていただく ・難民の地域定住を目指す事業であり、地域を尊重した活動とする		
実施期間	令和5年5月31日～令和6年3月29日(第2回12月3日、第3回3月29日)	開催時間・回数	1回2時間 × 2回 = 4時間 ※第1回は個別説明による持ち回り決議

特定のニーズに応じた日本語教育の実施 【名称：「にほんごひろば」の整備】	
①「にほんごぷろぼの」ルームの開設 ②「地域につながるための日本語クラス」の開催 ③「生活力向上のためのワークショップ」の開催	
取組の目標	① 日本語力の向上 ・おかれた環境等から日本語学習の機会を得にくい難民・避難民が有資格の日本語教師から個別に日本語を学ぶ機会を提供する、個々の都合やニーズを考慮した学習メニューを作成し、1年間で各技能とも、参照枠1段階以上の日本語力向上を目指す ② 地域とのつながりをつくる・ふやす ・自身の周りにある様々な場所に自ら出向いたり、地域に暮らす人々とのやりとりを経験したりして、地域とのつながりを少しでもふやす ③ 生活力の向上 ・「生活者」として「日本語」は「生活」と共にある。生活に関する知識情報

※以下、①～③の取り組みについて記す

①「にほんごぶろぼの」ルームの開設

内容	学習者、指導者それぞれのニーズ等を考慮してマッチングを行い、オンライン(ZOOM)上もしくは状況に応じて対面で、日本語教師による個別の日本語学習支援を行う 日本語教師のプロボノ活動として、日本語学習の必要の高い難民・避難民の日本語需要に対応する ■学習活動の流れ 1 日本語学習希望者へのヒアリングを行い、「日本語力」「日本語学習歴」「手持ちの教材」「ネット環境」「方式(オンラインで対応可能かどうか)」「手持ちのデバイス」など確認(総括・中核コーディネーターが対応) ↓ 2 登録している日本語教師とのマッチング(中核コーディネーターが調整) ↓ 3 指導者と学習者にて学習開始(共有フォルダーの確認、基本的にはやりとりは、ドライブ上で個人情報の共有なしに進める、<u>学習記録は統一フォーマットを利用し、細かな「学習計画」が記されるよう配慮、必要に応じて、アドバイザーがドライブ上の学習記録にて、もしくはオンライン上で助言</u>) ↓ 4 第三者による「見学」(ただし、「にほんごぶろぼの」登録者のみ) ↓ 5 不定期ではあるが、必要に応じて、「学習者」「指導者」「総括もしくは中核コーディネーター(アドバイザー)」にて振り返りを行う ※本年度は「難民等への日本語教師(初任)研修」にて実習アドバイザーの伴走があった、実習アドバイザー会議は当該事業にて7月10日から3月15日にかけて計10時間行われた) ■日本語指導者の参加開始までの流れ 1 活動内容や難民等についての開始時研修受講 2 参加登録フォーマットの送信(※個人情報への配慮等記載の誓約書への同意を含む) ↓ 3 具体的な活動内容、注意事項等の確認 教室見学等で参加学習者や「にほんごぶろぼの」への理解を深める ↓ 4 日本語学習者とのマッチング、数回の学習活動を経て、授業内容や教材の決定 ↓ 5 必要に応じて総括・中核コーディネーター(アドバイザー)や主催団体からの助言
-----------	---

を得る ■想定する日本語指導者 以下を想定している 1 難民・避難民への日本語教育に関心のある日本語教師、プロボノ活動に関心のある日本語教師 2 文化庁による現職日本語教師研修プログラム(「難民等に対する日本語教師【初任】研修」、「生活者としての外国人」に対する日本語教師【初任】研修」受講者(日本語教師) 基本的には個別の日本語指導になることから、<u>日本語教育の質をどのように維持するか、学習者の学習意欲をいかに維持するか</u>、が課題と考えられる。その対応策として以下の方策を考え、実行した ■日本語教育の質の維持 1 Slack の専用ワークプレイス「にほんごぶろぼの」に参加し、とくに同じ学習者の指導にあたる者同士、総括・中核コーディネーター、アドバイザーは専用チャンネルに参加し、やりとりを行った。学習者情報(最低限の情報に止める)、授業記録はストック情報として、google driveを利用して共有した。同じ学習者を見る者同士のやりとりはそこそこ活発に行われていた。ときには指導上の悩みを相談したり、グッドプラクティスを共有したりすることが、指導の質、モチベーションの維持向上につながっていた。 マッチングがうまくいっていない場合もあるだろうことから、総括、中核コーディネーター、アドバイザーなど第三者が学習者の様子をうかがい、細やかにフォローした。 ■学習者の学習意欲の維持 個別の学習だけでは、マンネリ化に陥り、学習意欲が低下することも想定される。日本語指導者が、「地域とのつながり」を意識して日本語指導にあたることはもちろんであるが、後述する「生活力向上のためのワークショップ」「いつでもプレゼン」に参加することで、「にほんごぶろぼの」を通じた「にほんごひろば」という大きなコミュニティに参加しているという意識がもってもらえるのではないかと期待している。			
取組による特定のニーズに対する工夫		難民・避難民一人一人の日本語学習のニーズに合わせた日本語支援が可能である。個別最適な学びにより、日本語習得が進み、より良い地域とのかかわりをもてるようになる	
実施期間	2023 (令和 5) 年 5 月 31 日～ 2024 (令和 6) 年 3 月 29 日	授業時間 ・ コマ数	1 回 時間 × 回 = 2,400 時間程度
対象者	難民的背景をもつ方	参加者	総数 115 人 (受講者 45 人指導者・支援者等 70 人)

日本語教育の言語技能とレベルについて	・参加する学習者の日本語力、目標は多種多様であり、その多様さへの一つの解決策として考えたものが「にほんごぷろぼの」である。どの言語技能についてもゼロスターターだった学習者が「にほんごぷろぼの」への参加により、1年間でA2レベル、B1レベルに達するケースもあった。									
日本語教育の対象とする生活上の行為について	・参加する学習者の日本語力、目標により、「生活上の行為」についてのニーズや意識も学習者それぞれであった。基本的には、個々の事情を汲み取り、柔軟に対応することができた。									
使用した教材・リソース	・学習者ごとに異なるが、「つながるひろがるにほんごでの暮らし」（文化庁）、「いろいろ日本語での暮らし」を利用する学習者／指導者が多く見られた。									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	1人									
	ミャンマー 26人 アフガニスタン 9人 エチオピア 3人 シリア 3人 スーダン 1人 コンゴ民 1人 その他1人									

（１）特徴的な活動風景（２回分）

取組事例①

【令和５年７月２５日】

DV 避難中の女性／指導者（女性）授業記録より 場所：某区役所内相談室

内容

- ・移転先の住居の様子や近所のスーパーなどについて、簡易な会話。
- ・『いろいろ』L9-1,2 時間についてのQA（復習なのだが、「午前、午後」を忘れていて、スムーズには使えなかった）前回のクラスから時間が結構空いたためか、聞く・書く力が少し後退したように感じた。）
- ・みん日 L9 語彙の一部と「～が好きです/好きじゃありません/嫌いです」の導入。いろんな名詞を挙げて、「～が好きです/好きじゃありません…」で言ってもらった。（以前にも何度か触れた文型で、よく理解できていた。）
- ・漢字
（引っ越したことから）新しい自分の住所を漢字で書く練習

宿題

- いろいろな物について「～が好きです/好きじゃないです/嫌いです」がスムーズに言えるように練習。
- ・ディクテーション（復習としてのみん日 L5 の文型 3 文）

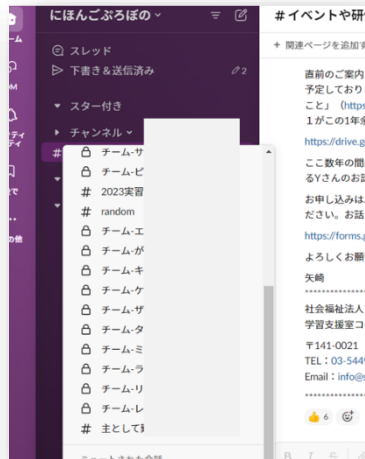
その他

- ・今日、引っ越し先から初めて一人での来所だったが、迷うことなく来られたとのこと。部屋の様子を携帯の動画で見せてくださった。洗濯機などの電化製品はうまく使えている様子。

- ・新居に移り、全くの一人暮らしとなり心配だったが、新しい生活に前向きのように見受けられた。しかし、やはり少し元気がないようにも感じた。
- ・周辺のスーパー、何店かに出かけ、道に迷ったこともあったらしい。

※配慮の必要な学習者であり、写真撮影等はしていない。

【Slack の「にほんごぶろぼの」ワークスペース】



【google drive 上の学習者情報共有】

■名前	イ	■性別	女
■出身国	ア	■年齢	50
■言語			
■来日時期	20		
■来日経緯	ル		
■家族	夫		
■日本語の学習状況	ル		
■リソース			
■その他			

取組事例②

【令和5年3月15日】

アフガニスタンから退避した家族の母親／指導者（女性）授業記録より 形態：オンライン

テーマにもとづいたやりとり

通常のやりとり（※指導者は、ときにスカーフを巻いてヒジャブのようにしている）

「ラマダン中の過ごし方」について、できるだけ学習者が話す時間を多くする

「家族のこと」について、大家族なので、家族の呼称を言えるようになるだけでも大変

教材を用いた語彙拡充と文字練習

『はじめの500語』（ペルシャ語版、さぼうと21作成） P32, 33（くだもの、やさい）復習

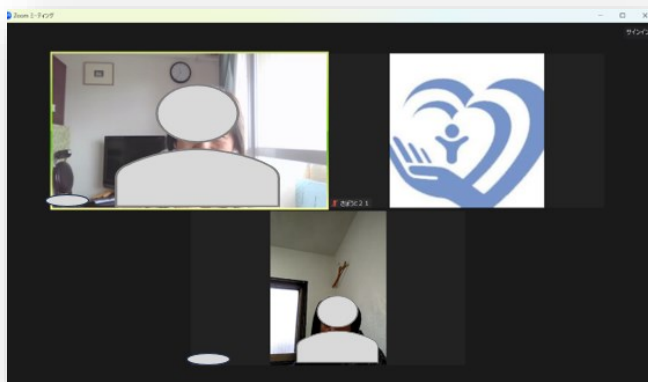
P34～38まで 導入と発音練習、語彙を使ったやりとり（ハンバーグやピザは手作りしているらしい）

『ひらがなステップ2』 は行

特に問題なし。（次回からは片仮名もすすめようかと思う。）

その他

お嬢さんの風邪がうつったとのこと。だが学習意欲はある。



くだもの/kudamono/fruits/くだもの			やさい/yasai/vegetables/やさい		
バナナ (banana)	りんご (ringo)	みかん (mikan)	たまねぎ (tanenagi)	きゅうり (kyuuri)	キャベツ (kabayatsu)
バナナ	りんご	みかん	たまねぎ	きゅうり	キャベツ
いちご (ichigo)	メロン (meron)	すいか (suika)	レタス (retasu)	にんじん (ninjin)	ピーマン (piman)
いちご	メロン	すいか	レタス	にんじん	ピーマン
ぶどう (budou)	もも (momo)	パイナップル (painappuru)	なす (nasu)	トマト (tomato)	だいこん (daikon)
ぶどう	もも	パイナップル	なす	トマト	だいこん
レモン (remon)	りんご (ringo)	みかん (mikan)	ピーマン (piman)	きゅうり (kyuuri)	キャベツ (kabayatsu)
レモン	りんご	みかん	ピーマン	きゅうり	キャベツ

(1) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

- ・本年度の目標は十分達成できた。その理由として以下があげられる
 - 1 45 人の難民的背景をもつ人々に日本語学習の機会が、彼らの希望する時間帯、内容等で提供された
 - 2 「登録」「マッチング」「日本語学習／指導」という「にほんごぶろぼの」のかたちが確立した
 - 3 学習参加者 45 人のうち、42 人が学習を継続した
- ・人材育成の事業とうまくつながり、「難民等への日本語教育人材」に対して難民当事者の方々に日本語指導を実際に行う場が提供できた

(2) 今後の改善点について

- ・当該年度は、仕組み作りに注力したが、次年度以降、徐々に学習者が「大きなコミュニティへの参加」を意識し、励まし合いの機会が提供できるよう、努めたい。
- また、自ら学習の振り返りを行い、自身の日本語力を客観的にとらえられるような自立した日本語学習者となるため、学習記録やポートフォリオを有効に活用できるよう、日本語教師が誘導していくことも学習意欲の維持、学習の継続につながるものと考えられる。
- ・学習者からは「評価」（自分の日本語は今どうなのか、上手になっているのか）を期待する声が寄せられているが、今後の検討事項である。
- ・「持続性」を考えた時、まずは、マッチングの効率化が考えられるが、現状、良い方策はみつかっていない。今後の検討事項である。

②「地域につながるための日本語クラス」の開催

内容		【教室 1】【教室 2】 既存のオンライン教材を利用しつつ、地域の「場所」や「人」につながる課題が出され、その課題達成の過程で受講者が地域と接点をもつことを期待する。 ■使用教材 文化庁「つながるひろがるにほんごでのくらし」（以下「つなひろ」） その他、指導者作成教材を利用 ■授業内容 1 課題の達成状況を共有する→「共有」そのものが難しかった 2 「つなひろ」から 1 回 1 シーンを選択 3 読み書きに挑戦する時間→達成を共有 4 教室ごとの課題への対応	
取組による特定のニーズに対する工夫		地域社会とのつながりをもつことを目的として掲げ、それぞれの地域の場に出向いたり、人とのやりとりを体験したりすることに前向きになれるような授業運びを進める。とくに自身が暮らす地域についての理解を深め、「自分の地域」という意識がもてるように意識した	
実施期間	2023（令和 5）年 5 月 31 日～ 2024（令和 6）年 3 月 29 日	授業時間 ・コマ数	【教室 1】 1 回 2 時間 × 32 回 = 64 時間 【教室 2】 1 回 2 時間 × 19 回 = 38 時間
対象者	【教室 1】 非識字者含む女性 【教室 2】 10 代後半～20 代	参加者	【教室 1】 総数 4 人 (受講者 3 人、指導者・支援者等 1 人)

	前半の男女 ※共にアフガニスタンからの 退避者		【教室2】総数 6人 (受講者 5人、指導者・支援者等 1人)							
日本語教育の言語 技能とレ ベルにつ いて	【教室1】 定住支援プログラムを終えていたが、まだ日本語はA1にも達していなかった、とくに「読む」 「書く」は困難を極めた、終了時は何とかA1に達した程度 【教室2】 定住支援プログラムを終えており、A2レベル前半でスタート、終了時A2～B1レベル 言語技能は、「やりとり」「聞く」がB1レベルに達している									
日本語教育の対象 とする生 活上の行 為につい て	主に「健康・安全に暮らす」「消費活動を行う」「人とかかわる」などをとりあげた									
使用した 教材・リ ソース	「つながるひろがるにほんごでのくらし」 『はじめの500語』（ペルシャ語版、さぼうと21作成教材） その他、指導者の作成教材									
受講者の 出身（ル ーツ）・国 別内訳 （人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパー ル	タイ	インド ネシア	ペルー	フィリ ピン	日本
	アフガニスタン 計8名									

（1）特徴的な活動風景（2回分）

取組事例①

【教室1 第20回 令和6年1月6日】 非識字者含む女性3名／指導者（女性）授業記録より 形態：オンライン ルーティンのやりとり 挨拶／日にち 雑談 「休みの間何をしましたか？」 つなひろを使って レベル1「道をきいてみよう」https://tsunagarujp.bunka.go.jp/level01/a06 9-1 このみちをまっすぐいってください ①導入 ・スマホで検索しているワンカット、道を教えてもらっているワンカットを見せて、何をしている？など、考えてもらう ・流れの確認（PPT）：「道がわかりません」→「人に聞きます」→「教えてもらいます」
--

②動画視聴

- ・1回目（1倍速）／2回目（0.7倍速）／3回目（会話ごとに止めながら）

③内容確認

- ・何をしていますか？／なんて言っていますか？ 聞き取れた日本語確認

④このフレーズを覚えよう

- ・「あのう、すみません」リピート
- ・「～に行きたいです」（郵便局／〇〇小学校／市役所他）代入練習
- ・「どのくらいかかりますか」リピート

① 役に立つ言葉

- ・位置詞：上・下・前・後・横・となり・中・外 ・方位：東・西・南・北
- ・道路にある物：信号／交差点／横断歩道／歩道橋／橋／踏切／角

学習者の様子

- ・新年早々時間通り参加。日本語学習意欲が感じられる。
- ・Aさん、新年の挨拶を言おうと頑張っていたが、「明けましておめでとう」と「今年もよろしく」が混ざってしまったような言葉を言っていた。
- ・Bさんが国のの新年は2月だと言っていました。そのころ、一緒に何かイベントが出来れば
- ・休み中に何をしたか聞いたら、Aさんが、1月1日に家族で公園に行ったと話してくれた。Cさん宅も公園に行ったとのこと。お茶を飲んで、ハラルレストランに行ったとか。どうやら、コミュニティで行ったようだ。ちょうど公園にいた時地震に遭って、揺れを感じたそう。特に2家族には被害はなかったようで、良かった。
- ・今回は「～に行きたいです」で、地元の場所を使って代入練習をした。Aさん、息子さんの学校（〇〇小学校）が口が回らず、スムーズに言えていなかった。場所名を入れ替えて3回ずつ発話してもらったので、少しでも口から日本語が出てくればと思う。

取組事例②

【教室2 第5回 令和5年10月28日（土）】9:00-11:00

兄弟（10代後半～20代前半）5名／女性の指導者 授業記録から 形態：対面（西市民活動センター）

文法理解

A) 【TRY N4について】

27の続きと28「～のに」（15「～のに」との比較も検討しました。）

29 受身

やりとり練習

B) 会話練習

復習として「つなひろ」のレベル3シーン1「職場であいさつをしよう」で会話練習の続きをした。

※漢字練習には時間切れで進めず

学習者の様子

- ・今日も積極的に授業に参加して、例文をたくさん出してくれた。
- ・「漢字」以上に「文法」をやりたい様子

※配慮の必要な学習者であり、写真撮影等はしていない。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

目標は十分とは言えないが、一定程度達成できた

- 1 学習に慣れていない女性たち（教室1）が日本語学習を何とか継続できた
- 2 初めて対面活動を経験した学習者（教室2）は、今まで学んだことの中で理解が不十分な所を積極的に質問するなど、大変熱心に学びを深めた

(4) 今後の改善点について

- ・「つなひろ」については、生活の場面をすぐに伝えられるという点で、やはり有益であるが、生活が動き始めないと生活場面への想像が及ばないこともあり、1人で外出することのない、一部の女性たちにとって必要な日本語は何なのか、しっかりとした検討が必要である
- ・就労に多くの時間を割かれることの多い男性たちにとって、はたして「つなひろ」は興味をもつテーマとなっているのかどうか。こちらもしっかりとした検討が必要である

② 「生活力向上のためのワークショップ」の開催 ※本取組は別事業にて経費支出している

内容	■ワークショップ実施の意義 難民・避難民が地域社会につながり、定住生活を始める際に、日本の制度や習慣などについての知識情報不足が、スムーズな定住を妨げることがまま起こる。日本語が分かっているのにやりとりが理解できないという状況は珍しいことではなく、母語で制度や習慣などの情報を得ることによってそのような状況が改善されることも多い。 難民・避難民の母語は、日本では少数言語であることが多く、多言語翻訳の対応からも漏れることが多い。また、母国にない制度の理解をする際には、書かれたものを読むだけでは十分に理解できているかどうかは分からず、口頭でやりとりをしてはじめて理解できるということも多い。 さらに、当団体のこれまでのワークショップの実施から、この種の知識情報に関わる分野の理解は、背景を同じくする同国人のグループで学ぶ方が効果的だと実感している。 ■使用した資料 過去の同種の資料を参考にしながら、総ルビ付きの資料を新たに作成する ■ワークショップの実施 基本的にオンラインで実施、各分野の専門家が、やさしい日本語で話をする通訳は逐次通訳。「ミャンマー語対応」「ダリ語対応」を別々の時間帯で実施した。 各回のテーマは以下 第1回 日本の学校の制度を知ろう（さぼうと21） 第2回 ライフプランと無理のない家計（FPの会） 第3回 税金について知ろう（FPの会） 第4回 子どもの教育にかかるお金（FPの会） 第5回 防災を知ろう（プラスアーツ）
----	---

取組による特定のニーズに対する工夫		少数言語の場合、通訳を探すことも難しいが、当団体のこれまでの活動実績、NPO 法人国際活動市民中心との連携により、通訳配置ができています。母語により、日本社会の様々な制度を正しく理解することは、地域社会への定住に大きく益するものであると考えられる また、同じ国の出身者が、地域をこえて母語により共に学ぶ機会を得ることは、孤立しがちな難民・避難民の心の拠り所にもなることが期待できる								
実施期間	令和5年 12月 23日 から 令和6年 2月 17日 まで		授業時間 ・コマ数		【第1部】 1回 2時間 × 5回 = 10時間 【第2部】 1回 1.5時間 × 5回 = 7.5時間					
対象者	地域定住を始めた難民・避難民等（第1部はミャンマー語対応、第2部はダリ語対応）		参加者		【第1部】総数 20人 （受講者16人、指導者・支援者等4人） 【第2部】総数 18人 （受講者14人、指導者・支援者等4人）					
日本語教育の言語技能とレベルについて	本取り組みは日本語そのものを学ぶものではないが、定住に必要な知識情報を得ることで、結果的に日本語の習得への意欲を高めることが期待できる									
日本語教育の対象とする生活上の行為について	主に「消費活動を行う」「健康・安全に暮らす」「社会の一員となる」などをとりあげた									
使用した教材・リソース	講師作成資料									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	ミャンマー 16人 アフガニスタン 14人									

（１）特徴的な活動風景（２回分）

取組事例①

【第2回 令和6年1月27日（土）】 第1部（ミャンマー語） 12:30～15:00（時間延長） 第2部（ダリ語） 19:00～20:30 テーマ「子育て世代の家計管理」 講義など

- 1 ライフプラン、人生の三大資金、ライフイベント表の作成
- 2 家計をチェックしよう（収入のチェック、支出のチェック）
- 3 貯蓄しよう

質疑応答

感想・質問

-役立つ勉強会をありがとうございます。現状は手取り 20 万円で支出は収入を大きく上回っている。今回は貯蓄の話だったが、残念ながら貯蓄する余裕はない。もっとコツをおしえてください。（講師：小さい金額の節約が、将来の節約につながる。今は貯蓄が無理でも、家計をチェックするのは大切なので、定期的にやって欲しい）

-携帯電話と光熱費を一緒に払うと得になるサービスは知らなかった。調べてみたい。



取組事例②

【第5回 令和6年2月17日】

第1部（ミャンマー語） 12:30～15:00（時間延長）

第2部（ダリ語） 19:00～20:30

※テーマをミャンマー語の回と、ダリ語の回で少し別のものにする

第1部（ミャンマー語）「自宅の備え」

第2部（ダリ語）「防災の基本」

講義など

- 1 日本と地震
- 2 地震から身を守る（日ごろからの備え、地震直後、その後と段階別にポイント提示）
- 3 在宅避難（第1部のみ）

1 質疑応答

感想・質問

-逃げるための通路を確保する為の方法がよくわからない（説明補足

-余震が来る期間はどれくらいか？場合によるが、数分のときもある、1週間後のときもある。

-充電器の話があったが、ソーラー式は良いか？蓄電や出力がやや弱い。乾電池式と併用する形が良い

-日本の電化製品のコンセントでは感電しないと聞いたが安全か？（切れた電線には近づかない、コンセントにも念のため触らない。震災では感電と火災の危険があることを説明した）



日時 Date/time	タイトル Topic	学べる内容 Details
1 12/23 (土) 12:30~14:30	日本の学校の制度を知ろう Education System in Japan	日本の学校の制度、義務教育、いろいろな進路について Japanese school system, compulsory education, and various school opportunities
2 1/27 (土) 12:30~14:30	ライフプランと無理のない家計 Planning for sustainable household budget	
3 2/3 (土) 12:30~14:30	税金と社会保険について知ろう Tax	所得税や住民税の概要 Income tax and resident tax 確定申告について知ろう Tax return
4 2/10 (土) 12:30~14:30	子どもの教育にかかるお金 The cost of education	教育費 The cost of education その他にかかるお金と資金 Factors contributing to costs
5 2/17 (土) 12:30~14:30	防災を知ろう Emergency preparedness	自宅で避難する、自宅ではない場所に避難する（逃げる） Where to evacuate 家の安全、準備 How to prepare どのように家族に連絡するか How to contact family members

（１） 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

目標は十分達成できた

- 1 ミャンマー出身者については比較的来日年数の浅い（とはいえ 10 年未満程度）方が参加するようになり、内容もあまり難しくならないよう準備したため、参加者一人一人の学びが確実に進んだ
- 2 アフガニスタン出身者は、来日から 2 年程度経過した方々が多く、講師が事情を理解して、説明の仕方や表現の仕方などに工夫をこらしてくださったことから、内容は十分に理解できていたと思われる
- 3 講師も在住外国人を対象とした講演に慣れてきており、非常にわかりやすい日本語で説明をしてくださっている。実際に外国人住民との接触が増えることで、講師の話がどんどんわかりやすくなっている

※終了後のアンケート結果

回答数のべ 20 人 「とてもよかった」 14 人 (70.0%) 「よかった」 6 人 (30.0%)

（２） 今後の改善点について

- ・オンラインでの実施の良さは大いにあるが、ワークショップなどがもっと活発に行われるよう、さらに工夫が必要である
- ・貯蓄などの話は、現状、大家族を抱えつつも安定した仕事が見つからない方々にとっては、やや共感を得にくいトピックであった

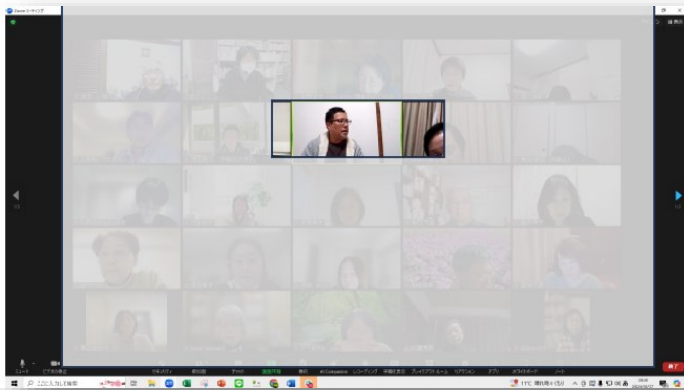
取組の成果の発信 【名称：活動成果報告会の開催】			
取組の目標	難民・避難民の方々が日本社会に定住するにあたり抱えている困難が、ホスト国である日本社会の人々に伝わっておらず、難民・避難民の状況や心情をいかに発信していくかは、大きな課題である。（個人情報への保護にも、十分な配慮が必要である。） 本取り組みの目標は、取り組みの成果をより多くの方々に知ってもらうことであるが、同時に日本に暮らす難民・避難民のおかれる状況と心情を理解する人を一人でも多く増やすことである		
内容	1 活動成果報告（本事業総括コーディネータ 矢崎理恵） 2 難民的背景をもつYさんのお話を聞く 質疑応答 3 地域での日本語教育、多文化共生活動の専門家によるお話		
取組による特定のニーズに対する工夫	活動成果報告では、現在の日本の難民受け入れの状況などを盛り込み、急増する難民の日本語教育について、日本語教師が日本語教育の専門性をもってプロボノ活動をすることについて考えるきっかけを具体的に提示した。また、同胞の手助けを続ける「先輩難民」の声をそのまま届け、参加した方々に特定のニーズのある人々のことを理解していただけるようにした		
実施期間	令和6年3月27日	時間数	1回 2時間 × 1回 = 2時間
対象者	広く一般公開	参加者	総数 55 人

（１）特徴的な活動風景（２～３回分）

取組事例①

【令和6年3月27日 19時半-21時半】 オンラインZoomを利用して、実施した。 1 活動成果報告（総括コーディネーター） 日本の難民受け入れの大きな変化、補完的保護制度の開始などを紹介し、急増する難民の日本語教育が多様化していることをお話し、その対応策の一つとして、「にほんごぷろぼの」の取組を共有した。 また、日本語教師が「プロボノ」活動について、どのような意識をもっているかを、「にほんごぷろぼの」に参加した方々へのアンケート調査をもとに紹介した。 2 難民的背景をもつYさんのお話を聞く 難民的背景をもち、在住歴30年、新たに来日した同胞の支援にあたるYさんに、母語でお話をしていただいた。息子さんが通訳を務めてくださった。ご自身の体験や、ここ数年で来日した同胞の困りごとや状況、支援する側としての想いなど、語っていただいた。 3 地域での日本語教育、多文化共生活動の専門家によるお話 1と2を受けるかたちで日本語教育の専門家、松尾恭子さんと栗又由利子さんにお話しいただいた。お二方のこれまでの経験に基づくお話は、「難民の地域定住」に貴重な示唆を与えるものであった
--

【活動成果報告会の様子】



【広報用チラシ】



(1) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

主催側の目標は十分に達成していた。

- ・参加者 55 名のうち、3 月 29 日時点で 37 名より事後アンケートに回答があった。

※終了後のアンケート結果

「とてもよかった」27 人（73.0%） 「よかった」10 人（27.0%）※

「Y さんのお話が聞けたこと、また Y さんにつながる方々との結びつきを実感させていただけるようなお話も聞けたことで、支援というかフラットな関係づくりに大切な根本的な要素を再確認できた気がします。」「Y さんの切実な思いに触れる事ができた。多くを語らず、しかし相談相手のために自分の事よりも親身に力になろうとサポート活動をされている姿に日本人としては、少し恥ずかしい思いだった。」など、新規来日した同胞の支援に尽力する難民当事者 Y さんのお話に触発されたというコメント、

「活動報告会では、この一年のさほうと 21 の活動内容の詳細がわかってとても良かったです」など、当団体の今年度の取組の全体の様子が理解できたというコメント、

「私は常々、難民の日本語教育や地域の日本語教室に携わる方々の活動に感銘を受けるとともに、なぜそこまでするのか？そこまで頑張る原動力は何なのか？ということが知りたいと思っているのですが、本日のお話を聴いて、人を動かすのは、やはり人の力なのかなと感じました。そして、自分にもできることはないか、少しでもいいから何かできないか、という気持ちを新たにしました。とても有意義な時間でした。ありがとうございます。」「Y さんのお話、また地域（地方）の活動の難しさ、困り事等…もう少し（深く）お聞きしてみたいと思いました。」「実際に、長く日本に住んでいる方のお話を聞けました。難民の方の置かれている状況を具体的に知ることができました。Y さんが同じ国の方に献身的にサポートしている様子がわかりました。他のお二人のお話、どのように関わっていらっしゃるのか、伺えて、私も色々考えることができました。難民の方のサポートは繋がりが重要だと思いました、また日本語だけのサポートではないのはより明確になりました。」など、コメンテーターとして登壇いただいたお二方のお話も含めて、「地域が難民を受け入れるということ」のテーマについて、多面的理解が進んだというコメントも多く見られた。

(2) 今後の改善点について

- ・当事者の方との調整に時間がかかり、広報が出遅れた。次回以降は、より多くの方にご参加いただけるよう、周知に力を入れたい。
- ・今回はお話しくださる方の秘匿性に配慮した結果、記録は極力控えた。貴重なお話だったことを思うと、せめて録音だけはしておくべきだった。

任意の取組			
【名称：難民・避難民等への日本語支援・活動基礎講座⇒難民・避難民への日本語支援開始時研修の実施】			
取組の目標	「にほんごぷろぼの」参加日本語教師を対象として、難民・避難民への日本語支援を開始するにあたり、身につけておきたい基礎知識、対人支援の姿勢などを理解し、活動により良い形でかかわることができるようになる		
内容	※「同種の講座を他の研修等で受講している場合は、本講座を受講する必要はない」としていたが、今年度は「文化庁による現職日本語教師研修プログラム（「難民等に対する日本語教師【初任】研修」受講者（日本語教師）が「にほんごぷろぼの」への主たる参加者であったため、「活動基礎講座」は個別の研修開始時研修とした。 ・以下の内容について、本事業の総括コーディネーターがオンライン、もしくは対面にて研修を行った。 1 日本に暮らす難民のこと 2 難民等への日本語教育 3 難民の地域定住とは		
取組による特定のニーズに対する工夫	「にほんごぷろぼの」の受講者は、「日本社会での自立に向けて、地域社会につながりを持ち、それぞれの定住生活をスタートさせる」というニーズをもつ難民・避難民である。日本語支援にあたり、「難民」について一定の知識を得て、日本語教師として対する際の姿勢など心得ておくことで、より良い日本語指導につながると期待される。受講者のニーズを充足させるために指導者の理解は欠かせないものである		
実施期間	令和5年5月31日から 令和6）年3月29日	時間数	1回2～3時間 × 5回 = 11時間
対象者	・「にほんごぷろぼの」参加日本語教師 ・難民・避難民への日本語学習支援等に関心のある一般市民	参加者	総数 5 人 ※その他、日本語教師以外 27 人対象に計 17 回研修実施 ※「難民等に対する日本語教師【初任】研修」47 人が当該研修に参加

（１） 特徴的な活動風景（１回分）

取組事例①

【令和6年1月8日】	
「にほんごぷろぼの」参加希望者（日本語教師養成講座修了者）1人／対面での研修	
内容	
1 日本での難民受入れの変遷、現在の状況	
2 難民等の抱える困難（成人、子ども）	
3 難民等への日本語教育概要	
4 難民の地域定住について	

5 さぼうと21の活動

質疑応答

活動見学

対面での実施であったことから、日本語支援の様子を見学、その後、質疑応答

その他

終了時に当団体作成の資料（データリンク）を共有

【研修資料】

条約難民

難民条約に定義された 難民の要件に該当すると判断された人

人種、宗教、国籍もしくは特定の社会的集団の構成員であることまたは政治的意見を理由に迫害を受けるおそれがあるという十分に理由のある恐怖を有するために、国籍国の外にいる者であって、その国籍国の保護を受けられない者またはそのような恐怖を有するためにその国籍国の保護を受けることを望まない者（難民の地位に関する条約 第一条 1951年）



1,117人 **5,049人**

（法務省 統計：1982年～2022年） ※人道配慮による「在留特別許可」

【参加者限定オンデマンド研修資料】



（2）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

主催側の目標は十分に達成していた。「にほんごぷろぼの」への**新規参加者 52 人**。

しかしながら、新規参加者 52 人中 47 人が、当団体が別途文化庁受託事業として実施した「難民等に対する日本語教師【初任】研修」修了者であり、当該研修受講者以外への働きかけが十分だったとは言い難い。

新規参加者 52 人中 31 人（「難民等に対する日本語教師【初任】研修」修了者 47 人中 27 人）が、年度終了時にも活動への参加を継続しており、適当なタイミングでの研修実施は、活動への理解、参加意欲の維持につながっていると言えよう。

（3）今後の改善点について

・「にほんごぷろぼの」への参加にあたり、研修受講を必須とした場合、「にほんごぷろぼの」への参加のタイミングを逸する可能性もある。とはいえ、頻繁に研修を行うことも難しく、研修講座の一部オンデマンド化などを検討する必要がある。

・「難民等に対する日本語教師【初任】研修」の一部を「にほんごぷろぼの」参加者にも参加可能とするなども検討してよいのではないかと考える

任意の取組			
【名称：「いつでもプレゼン」チャンネルの開催】			
取組の目標	・「にほんごぶろぼの」「つなくら」を受講する日本語学習者が、定期的に自身の日本語でのプレゼンテーションを発表できる場（You Tube を想定）をつくり、日本語学習の小目標を設けることで学習の意欲を維持すると共に、オンライン上に日本語学習の仲間をつくり、日本語学習の意欲を向上させること		
内容	・学習者の日本語でのプレゼンテーションを録画（ビデオカメラ利用、もしくは ZOOM 利用）し、YouTube のさぽうと 21 チャンネルに UP した。 当初は、一般公開も考えていたが、難民・避難民の秘匿性への配慮から、限定的公開に止めることとし、動画への誘導のための一覧を作成した。 流れ ・クラスごと、時期ごとに「わたしの好きな歌」「日本について」などのテーマを掲げ、参加希望の日本語学習者は、それらのテーマ、もしくは自分が話したいテーマで自身が話したいことを日本語教師、日本語学習支援者と共に考えながら、プレゼン用の原稿を仕上げる ・原稿ができあがったら、さらに口頭でのプレゼンテーションの練習を繰り返す ・準備ができたところで、参加者は支援者と相談してプレゼンテーションを録画し、さぽうと 21 に共有する 日本語学習への活用 ・自身が話したいことがらを何度も練習して上手に話せるようになる ・原稿作成のために何度も日本語を書く ・他の学習者のプレゼンを日本語教師（日本語学習支援者）とともに視聴し、感想を述べたり、書いたりする ・さぽうと 21 は学習者の過去のプレゼンテーションも UP し、貴重な「記録」を一カ所に収集した		
取組による特定のニーズに対する工夫	オンラインでの個別の日本語学習は自分の目標に合わせて最適な学習ができるなど、利点もあるが、ややもすればマイペースの学習となり、目標設定がいつのまにか曖昧になることもある。「日本社会での自立に向けて、地域社会につながりを持ち、それぞれの定住生活をスタートさせる」というニーズに応えるために、日本語学習の意欲を永く維持し、向上させる必要がある。「発信」の場があり、発信を通じて、他の日本語学習者や地域の支援者、地域社会で関わる方々に自身の想いや意見を伝えられれば、他者とのつながり、地域とのつながりにつながっていくことが期待できる		
実施期間	令和 5 年 5 月 31 日から 令和 6）年 3 月 29 日	時間数	-

対象者	・「にほんごぷろぼの」「つな くら」学習者	参加者	UPした動画 全 18 本 動画参加者 11 人
-----	--------------------------	-----	-----------------------------

(1) 特徴的な活動風景 (1 回分)

取組事例①

【令和 5 年 12 月 16 日】

当団体主催の日本語教室に参加中の女性（難民的背景をもつ方）

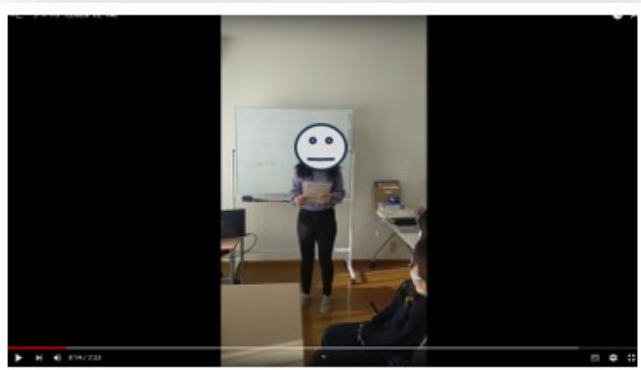
内容

- 1 「日本について」のテーマで、作文を書く
- 2 他の教室参加者と共にプレゼンテーションに向けて作文を推敲し、何度も練習を重ねる
- 3 プレゼンテーション／ビデオカメラで録画（12 月 14 日）
- 4 さぼうと 21 にて You Tube に UP、教室参加者、日本語指導者にリンク先を共有（12 月 16 日）
- 5 日本語クラスで動画視聴、さらに対話を続ける

その他

本人の同意を得た上で、参加者の勤務先関係者にも動画リンクを共有した

【プレゼンテーション】



【動画リンクブック】



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

目標は一定程度達成した。

実際には、参加者の秘匿性への配慮から、広く動画共有をすることは断念せざるをえなかった。（一時は、公開可能とした方でも、その後公開不可を伝えてくることなどあり、目標として掲げた 30 本の動画が公開できなかった

しかしながら、「いつでもプレゼン」のスタートの意義は大きい。企画時には、参加者（外国人住民）の目標可視化、外国人住民、日本語指導者間の共有を目標としていたが、実際に動画 UP したことにより、「外国人住民が所属する勤務先等に彼らの日本語力を説明するための手段」となりえた。また、各種研修において、外国人住民の生の声を届けるために、非常に有効な手段でもあった。さらに、過去の動画を保存しておくことで、外国人住民自身が、自身の過去の発表や日本語を振り返る機会となった。自身の日本語のみならず、内面の成長を知るために、「いつでもプレゼン」の果たす役割は大きい。

（３）今後の改善点について

- ・より多くの学習者が、「いつでもプレゼン」により参加するような方策をさぐり、その共有の方法をかんがえること

４．事業に対する評価について

（１）事業の目的・目標

- ・「難民・避難民が日本社会での自立に向けて、地域社会につながりを持ち、それぞれの定住生活をスタートさせる」というニーズに対応した日本語教育を行い、難民・避難民の地域定住の一助となること
- ・本事業の実施により、難民・避難民にとどまらず、とくに外国人散在地域において、「何の拠り所も地縁も人縁もない外国人が、ある地域でゼロから生活者としての営みをスタートさせる」というニーズに応える日本語教育の仕組みやプログラムの具体が提示できること

（２）特定のニーズの充足に向けて試行した方法

難民・避難民の地域定住の一助となるべく、彼らのニーズに合った、日本語教育の機会の提供に注力した。

- ・「にほんごひろば」整備事業として、とくに、「にほんごぶろぼの」ルームの開設、充実化をはかった。日本語教師の（自由な意志による）専門性を活かした社会貢献事業としても位置付け、両者にとって意義を感じられる仕組み作りであった。

- ・また、現職日本語教師研修プログラム（「難民等に対する日本語教師【初任】研修」）受講者（日本語教師）は、「にほんごぶろぼの」が開催されていることで、実際に難民的背景をもつ方々への日本語指導の実践が可能となった。難民的背景をもつ方々に対する日本語教育に関わる日本語教師人材の質の向上にもつながっている。なお、本教師研修プログラムに参加していない指導者も、日本語指導者が一定程度の理解をもって日本語指導にあたるよう、日本語指導者向け研修を良いタイミングで実施できた。

- ・より配慮の必要な学習希望者、より日本語学習の機会を得難い学習希望者に対しては、「地域につながるための日本語クラス（通称「つなくら」）開催により、日本語学習を継続することができた。学習を開始した８名は人数こそ限られるが、全員が最後まで熱心に学習に参加し、学習を継続できた。

- ・加えて、「生活力向上のためのワークショップ」の開催、「いつでもプレゼン」の実施により、日本語学習を別の側面から支える仕組みも有効であった。

（３）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

取組による特定ニーズの充足は、十分とはいえないが、一定程度達成できたと考えている。

以下、開始段階での目標数値と実績を照らし合わせる形で達成の程度を示す。

■「にほんごひろば」整備事業

① 「にほんごぶろぼの」ルームの開設

目標：総時間 3,200時間（20人計）（2時間×80回／週 × 20人）

実績：総時間 2,400時間程度（学習者 45人・のべ1,030人参加 指導者 のべ1,200人参加）
（1.5～2時間×1～3回×40週×30組程度）

② 地域につながるための日本語クラス(通称「つなくら」)の開催

目標：総時間 120 時間（1回 2時間 × 15回 × 4クラス）

実績：総時間 102 時間（1回 2時間 × 29回 × 1クラス、1回 2 時間 × 19回 × 1クラス）

③ 生活力向上のためのワークショップの開催 ※別事業にて実施

目標：総時間 20時間（1回 2時間 × 5回 × 2回）

実績：総時間 17.5時間（1回 2時間 × 5回 × 1回、1回 1.5時間 × 5回 × 1回）

■活動成果報告会

目標：総時間 5時間（1回 5時間 × 1回）、参加者 50人

実績：総時間 2時間（1回 2時間 × 1回）、参加者 55人

■難民・避難民への日本語支援・活動基礎講座の開催 ※別事業にて実施

目標：総時間 12時間（1回 6時間 × 2回）、参加者 50人

実績：総時間 11時間（1回2～3時間 ×5回）、参加者 5人（他、47人は「難民等に対する日本語教師【初任】研修」受講）

■「いつでもプレゼン」チャンネルの開催

目標：動画30本UP、参加者30人

実績：動画18本UP、参加者11人

（４）地域の関係者との連携による効果、成果等

- ・難民当事者に関する情報の共有等を目的に、アジア国際支援財団難民事業本部、なんみんフォーラムとの個別のやりとりを電話、メール等で続けた
- ・とくに新規居住者の多い、小山市内での状況を把握するために、小山市役所国際課、小山市市民活動センター、小山市小山城南市民交流センター、NPO 法人みんなの学び場おやま、小山市国際交流協会と、電話、メール、対面ヒアリング等でやりとりを続けた。場合により少数言語の通訳を紹介するなど協力した
- ・日本語教育の実施にあたり、とくに秘匿性の高い学習者については、情報の共有にも十分に配慮し、渋谷区役所福祉課、清瀬市役所福祉課、板橋区立前野小学校などと、主として電話でやりとりを続けた。必要に応じて、通訳を紹介したり、難民全般についての情報の提供や専門機関の紹介などを行った

（５）事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

- ・当団体ホームページ、難民支援団体へのメール、日本語教育関係のメーリングリスト等を活用して周知を図った。「難民等に対する日本語教師【初任】研修」を活用することにより、新たな日本語教育人材に当団体の存在や、事業内容などを周知することができた

- ・ 2022 年に実施した連続講座「地域が難民を受け入れるということ」の参加者が、新たな広報先として有効であった
- ・ 事業成果は、活動成果報告会にて広く周知できたと考えるが、「にほんごぷろぼの」という仕組みを確立したことにより、今後の広報に有効である

(6) 今回のプログラム実施を通して得られた知見やノウハウ

- ・ 今回の事業を通して得た、新たな知見として以下 3 点をあげておきたい
- 1 難民・避難民への日本語教育の「継続」のために、「にほんごぷろぼの」は有効に活用できる
「難民等に対する日本語教師【初任】研修」受講者 47 人が実践のために「にほんごぷろぼの」に参加したが、27 人が参加後もその自由意志により「にほんごぷろぼの」への参加継続を希望しており、無理のないかたちで難民的背景をもつ方々の日本語学習の機会が増やせることは有益な仕組みづくりへとつながっている
- 2 「タリバン侵攻」による退避という来日の背景から、アフガニスタンからの退避者を一括りにしてしまいがちだが、「民族（パシュトゥン、ウズベク、タジク、ハザラなど）」「宗教（シーア派、スンニ派）」「母語（ダリ語、パシュトゥー語）」「社会的地位」「教育程度」など多様であることを実感した。人間関係、人的ネットワークが見えない中、同国人だから、同民族だからというだけで安易に人と人をつなげてはいけないということが取組の中で改めて認識した
- 3 これまでは、成人が一人母国から逃れ、生活が多少安定したところで家族を呼び寄せるというパターンが多かった。アフガニスタンからの退避者の場合、家族全員での緊急退避しかも大家族ということで、生活面での安定は困難を極め、日本語学習の必要性は高いものの、その機会提供は公的支援だけで充足することは非常に難しいと実感している

(7) 改善点、今後の課題について

- 1 スタートさせたいいくつかの仕組みについて、再度検証し、「にほんごぷろぼの」「いつでもプレゼン」については、より効果的な運用を考えていかなければならない。
- 2 難民的背景をもつ方々が、地域で落ち着いた暮らしができるようになるためには、地域発の支援が必須であることは先に述べた。そこに拠点をもたない支援団体としては、地域独特の「繊細で微妙な人間関係」に配慮しながら、第三者の立場にある団体に求められる事柄を整理し、地域の方々とも良い関係を築いていかなければならない。そのためには、情報の整理、少数言語での情報発信などが、まず当団体にできることではないかと考えている。
- 3 全国どこでも、日本語教育が受けられるよう、地域の人々と、専門性をもった日本語教師が共に地域の日本語教育の体制づくりに参画することの重要性を実感した。そうした体制づくりは喫緊の課題であり、小さな支援団体としても、その重要性を、日本語教育の「現場」からいかに広く発信していけるかを検討したい。